

～ あれから7年、東日本の今 ～

津波被災地の気仙沼市、浪江町請戸地区を訪ねて

4月20日（金）、21日（土）東日本の津波被災地を訪ねました。事前に吉村昭の「海の壁 三陸沿岸大津波」を読んで参加しましたが、現地に足を運び、眼にし、聞いたものは、想像を絶するものでした。

4月20日

気仙沼市すがとよ酒店 菅原文子さん

一昨年12月17日に元あった鹿折の地に酒店を再建した「すがとよ酒店」の菅原文子さんを訪ね、お店の2階の交流スペースで、津波被災時の写真や動画などを見せていただきながら、貴重な体験談を聞かせていただきました。



震災前の店舗です。気仙沼の鹿折で酒屋を営んで90余年、地元密着で酒屋を続けてきました。

あの3月11日、予想をはるかに超える津波が店を襲い、2階に避難していた祖父母が亡くなり、夫の豊和さんも文子さんが必死に手を伸ばしたが、その手をすり抜けて津波に流され、行方不明になりました。



津波の「すがとよ酒店」周辺の風景



自宅の物干し台で赤いタオルを掲げた年配の女性がすがるように手を振り助けを求めている。2011年3月12日午前8時38分ごろ 宮城県気仙沼市（手を振っているのは菅原文子さん）



週刊新潮 2011年3月31日号

店は全壊、町は瓦礫に埋まりました。行方不明の夫を探すあてもない日々が続くなか「生きていくためには」と店を再開する決意をしました。



そんな時、全壊し瓦礫とヘドロで埋まった店の中を掘り返すと、商品が一部流されずに残っていました。あの時、夫が最後まで店を守ろうとシャッターを閉じていたため、流されずに残った酒達でした。水道もままならない時期だったので必死に沢水で泥を洗い流しました。



たくさんの方たちの力添えをいただき、震災から1ヶ月と12日後の4月23日に13坪の借地にテントとプレハブで「太田店」として再出発。店先にその酒達を並べると「流されずに残った縁起のいい酒だ」と喜んで手に取って下さいました。

当時まだ近所に店らしい店がなかった時期でしたのでたくさんのお客様に来店いただきました。そしてまた、離れ離れになったご近所さんや商店街の仲間にも再会することができ、うれしくて涙が出ました。

そして、震災後支援していた方の勧めで、京都の紙司柿本商事が企画した「恋文大賞」に応募、9千通の中からなんと大賞をいただきました。恋文は文子さんが夫の豊和さんに宛てた手紙です。

あなたへ

ひぐらしがうるさい位鳴いています。

きょうは八月二十一日、お盆を過ぎて街は静かになりました。あなたが突然いなくなって五ヶ月と十日。もう五ヶ月、まだ五ヶ月ととても複雑です。あの日、忘れようにも忘れられない東日本大震災が起きました。

あなたは迎えに行った私と手を取り合った瞬間、凄まじい勢いで波にのまれ、私の目の前から消えました。あなたはいつ体何処へ行ってしまったのでしょうか。

季節の巡りは早く、まもなく涼風が吹いて秋がやってきます。願わくは寒くなる前に、雪の季節が来る前にお帰りください。何としても帰ってきてください。

家族みんなで待っています。わたしはいつものようにお店で待っています。ただただひたすらあなたのお帰り待っています

平成23年8月21日 菅原文子

菅原豊和様へ

この手紙を書きあげた翌年の6月5日、夫の豊和さんは自宅の酒屋から数分の解体中の市営アパートの瓦礫の下で発見され、ようやく夫に「お帰りなさい」を言うことができました。



店は町の状況に合わせて引っ越しを繰り返し、平成25年6月1日に「魚町店」をオープン。長年住み慣れた町は津波でなくなってしまいました。あの日々を取り戻すため元の店のあった鹿折に戻ることを第一目標に営業することを誓いました。